

【研究テーマ】

末広学園ブリッジカリキュラムの創造

1 グループ校の概要

末広中（学級数14, 生徒数445, 教職員数33） 番町小（学級数19, 児童数569, 教職員数36）  
 新通小（学級数11, 児童数226, 教職員数20） 安西小（学級数12, 児童数297, 教職員数22）

2 研究の目的

教育施設分離型である末広中学校区グループ（末広学園）独自の組織的な協働システムにより、9か年を通して主体的に学ぶ児童生徒を育成する

3 取組内容

1 組織

- (1) 職員組織：各校分掌組織とリンクした各校代表教職員からなる教育課題推進局と教育課程局、全教員から構成される教科等教育局と学年教育局を設置し、月1回の「末広学園の日」を設定し活動
- (2) 地域組織：小中一貫教育推進委員会の下部組織として、学校評価部会、地域支援本部会、子ども見守りあいさつ部会、幼小連携部会を設置



2 職員組織による取組

(1) 教育課題推進局

- ①生徒指導部
  - ・4校共通のいじめ防止基本方針の作成
  - ・定期的な児童生徒についての情報交換
  - ・決まりの見直しと共通指導項目の実施
- ②健康担当部
  - ・養護教諭による中学校入学前指導
  - ・共通シートによる生活の振り返り
- ③特支教育部
  - ・特支学級、通級指導教室参観による特支教育理解
  - ・小中引継ぎの体制づくり
- ④ICT推進部
  - ・コラボノート交流（作品、発表動画、部活動質問等）
  - ・教職員の合同オンライン研修
- ⑤事務部
  - ・専用グループフォルダの改善
  - ・グループ校間での備品の有効活用



中学校養護教諭による指導



英語専科・GETによる外国語指導

(2) 教育課程局

- ①学習部
    - ・共通学習計画帳の導入
    - ・グループ校共通「末広学園図書館だより」の発行
  - ②特別活動部
    - ・中学生の小学校あいさつ訪問
    - ・あいさつ代表者会議（児童会・生徒会）の開催
- (3) 教科等教育局
- ・小中のつながりを意識した年間指導計画の作成
  - ・英語専科教員による小6及び中1の授業実践
- (4) 学年教育局
- ・児童生徒の作品交流
  - ・6年生の部活動体験



あいさつ訪問



部活動体験

3 学校評価

- (1) 評価部会組織：各校1名選出の評価委員+各校校長、教頭、教務 計16名
- (2) 評価書：4校共通（一部学校独自）
- (3) 評価指標と評価：全国学調（データの共有）、新体力テスト、共通アンケートによる客観的評価
- (4) 評価スケジュール：6月（末広中）、9月（新通小）、12月（安西小）、1月（番町小）

## 4 考察（成果と課題）

### 成果

#### 1 9年間の一貫した指導体制の確立

- ・全員参加の夏季研修、月に一度設定した「末広学園の日」を活用した各部の会合により、4校職員の相互理解が深まるとともに、共通指導への意識が高まった。
- ・グループ校内の職員の交流の場が増えたことにより、小中の職員間で日常的に児童生徒についての情報共有が進み、つながりのある指導体制が構築されている。
- ・小学校各教科の年間指導計画作成に中学校教員が関わることで、9年間を通して子どもを育てるという職員の意識が高まった。
- ・ICT共通研修やICT活用資料の共有等により、各校で情報端末の活用やオンライン配信、学校間での遠隔会議などを日常的に実施する体制が構築されている。

#### 2 小学校から中学校への接続の円滑化

- ・小学校間の合同行事や活動、6年生の中学校見学時における3小学校児童の交流等により、中学校入学後に人間関係の構築がスムーズに進み、中学校入学直後の生徒にとって安心感のある中学校生活スタートとなっている。
- ・5年生の中学校授業参観や6年生の部活動体験後にICTを活用し、小学生の質問に中学生が回答するという取組、さらに中学校生徒指導担当と養護教諭が2月に各小学校を訪問し、6年生に中学校生活について説明する機会を設けたことで、児童が抱いていた中学校生活に対する不安を軽減することができ、中学校入学を心待ちにする生徒が増えた。
- ・中学校籍の小学校英語専科教員が各小学校6年生の授業を受け持ち、共通した指導をしているため、中学校入学後の英語の授業が円滑に展開していく。また、中学校に小学校で指導を受けた英語専科教員がいることで、入学直後の生徒に安心感を与えている。

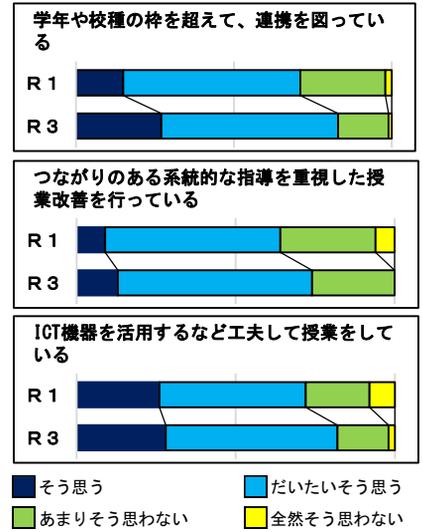
#### 3 共通の学校評価書の活用による情報共有

- ・評価書の指標を3年間固定、全国学力・学習状況調査結果の分析や各校共通アンケート結果等の客観的なデータを用いることにより、取組の様子やその成果が分かりやすいものとなり、教育活動へのフィードバックに有効であった。また、グループ校全体の取組に一体感が生まれた。
- ・全国学力・学習状況調査を3小1中で比較分析することにより、自校の課題や小中接続の課題が明確になり、次年度に向けた指導に活かすことができた。
- ・各校を相互訪問することで、小学校同士の横のつながりと連携、中学校に向けた縦のつながりが意識され、グループ校内の指導の一貫性につながった。
- ・従来各学校ごとに年4回程度実施していた評価部会を、持ち回りで開催することで各学校年1回の開催となり、負担が軽減された。

### 課題

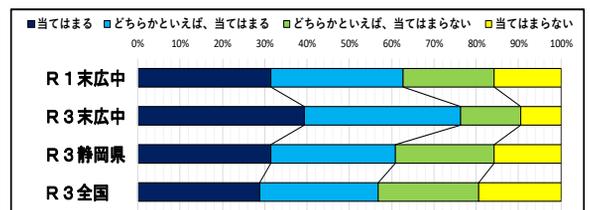
- ・各局・部におけるそれぞれの取組について、有効性が十分に検証されていない。
- ・新型コロナウイルス感染症拡大により、地域との連携に限られ、学校支援部会の活動が進展していない。
- ・施設分離型であるがゆえ、連携を進める上で距離的、時間的な面から職員への負担がかかる。

職員アンケート結果



英語の勉強は好きだ

全国学力・学習状況調査[末広中学校 生徒質問紙]



## 5 今後の方向性

- ・小中連携の有効性を検証し、活動を精選することで、持続可能な小中一貫教育システムを構築する。
- ・地域との連携を進め、小中一貫教育推進委員会から学校運営協議会への移行を目指す。